琉球大学学術リポジトリ

ブラジル沖縄系移民社会における4言語接触　ー一世話者の言語に見られる語彙的・音韻的・文法的な特徴ー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): ブラジル沖縄系移民社会, 言語接触, 言語使用の実態, 言語的特徴, 琉球クレオロイド, コロニア語
	キーワード (En): Okinawan immigrant society in Brazil, Contact linguistics, Cumnt use of the language, Linguistic features, Ryukyu Creoloid, Colonia-go
	作成者: 儀保, ルシーラ悦子, Gibo, Lucila Etsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010120

ブラジル沖縄系移民社会における4言語接触
――世話者の言語に見られる語彙的・音韻的・文法的な特徴－

儀保ルシーラ悦子

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．ブラジル沖縄コロニア語
Ⅲ．言語使用の実態および各世代の言語運用能力
Ⅳ．一世話者の言語に見られる語彙的・音韻的・文法的な特徴
Ⅴ．自然談話の分析
Ⅵ．まとめ

キーワード：ブラジル沖縄系移民社会，言語接触，言語使用の実態，言語的特徴，琉球クレオロイド，コロニア語

Ⅰ．はじめに

世界最大の日系人コミュニティーを築くブラジルには現在約150万人の日系人（移民とその子孫）が居住し，その1割を沖縄県系人が占めている。戦前から戦後に亘ってブラジルに移住した沖縄県系人は独特の言語を地球の反対側に運んだ。彼らの言語は長い歴史の中で移民社会と共に変化してきた。一世はブラジルでの言語的・文化的同化の過程でブラジルの公用語であるポルトガル語[1)]を習得し，日常生活で母語と併用するようになった。その結果，独特な体系を持つ言語が生成された。

ブラジル沖縄系移民社会の言語にはポルトガル語，一世話者の母語である琉球方言，移民前に琉球方言と標準日本語の接触によって生成された琉球クレオロイド[2)]，日系社会でポルトガル語と日本語諸方言（特に西日本方言）の接触によって生成されたコロニア語[3)]，世界の接触言語の中でも珍しい4言語コードの接触から成り立っていると考えられる。

ブラジルにおける一世話者の高齢化をはじめ，非日系人との結婚の増加など，社会的な変化によって日本語と琉球方言の維持が難しくなってきている。ポルトガル語，琉球方言，琉球クレオロイド，コロニア語の4言語接触の研究は，4つの言語接触がもっともダイナミックに進行した一世の話者が健在なうちにこの研究に着手しなければならない。

筆者は琉球大学の「人の移動と21世紀のグローバル社会」研究プロジェクトの一環として，ブラジルで調査を行なった。沖縄県人会や沖縄県系人の個人の家を訪問し，自然談話の収録と言語意識に関するインタビューを行なった。本論では，それらのデータを基に，特に一世話者の言語に見られる語彙的・音韻的・文法的な特徴について記述を行なう。

Ⅱ．ブラジル沖縄コロニア語

日系移民社会で話される日本語のバリエーションを「コロニア語」と呼ぶ。沖縄系移民社会で話される言語は琉球方言の影響も受けているため，他府県系人が話す言語と区別して「沖縄コロニア語」と呼んだ方が適切であろう。更に，ブラジルだけではなく，ハワイやボリビアなどの移住先国でも沖縄コロニア語が話されているため，本論ではブラジル沖縄系社会で話される言語を「ブラジル沖縄コロニア語」と呼ぶことにする。

ブラジル沖縄コロニア語は 4 言語コードの接触からなると述べてきた。工藤真由美編（2009；24p）の先行研究「ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触」では沖縄県系人の言語は A)沖縄方言と本土日本語の接触と混交, B)沖縄方言とポルトガル語の接触と混交，C)沖縄方言，本土日本語，ポルトガル語の接触と混交，いわゆる 3 言語コードをとりあげる A)，B)，C)の 3 パターンの接触と混交の仕方について記述がなされている。3 言語コードの接触は図 1 のように示されている。

しかし，より詳細な観点から見ると，ブラジル沖縄移民社会における言語接触は①琉球方言（先行研究で「沖縄方言」と呼ばれているものに相当する），②ポルトガル語，③琉球クレオロイド，④コロニア語の 4 言語コードの接触から成るともいえる。更に③は移民前に沖縄において起きた琉球方言と日本語（標準日本語を中心とする日本語）の 2 言語接触から成り立っており，④は移民後にブラジルにおいて起きたポルトガル語と日本諸方言の接触と混交から発生した言語だと考えられる。これを図で示すと，次ページの図 2 のようになる。

このように，4 言語コードの観点から言語を分析することによって，より詳細かつ正確に特徴をとりあげることができるのではないかと思われる。また，琉球クレオロイドはブ

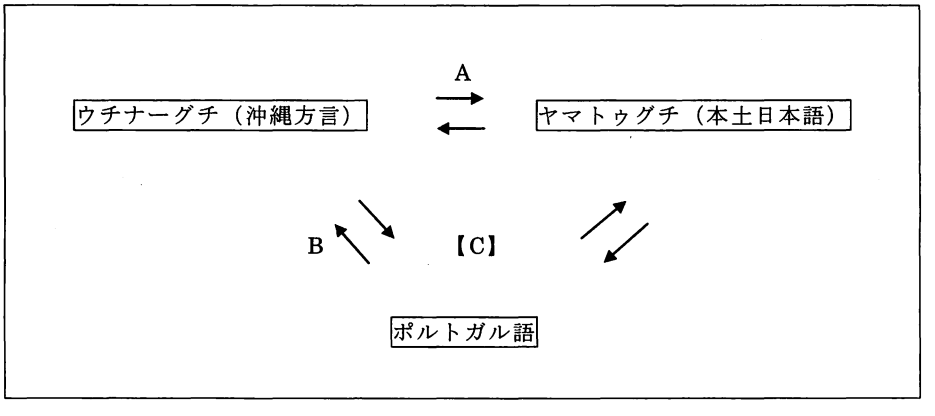

図 1　3 言語接触の観点

工藤真由美編（2009；24p）より作成。

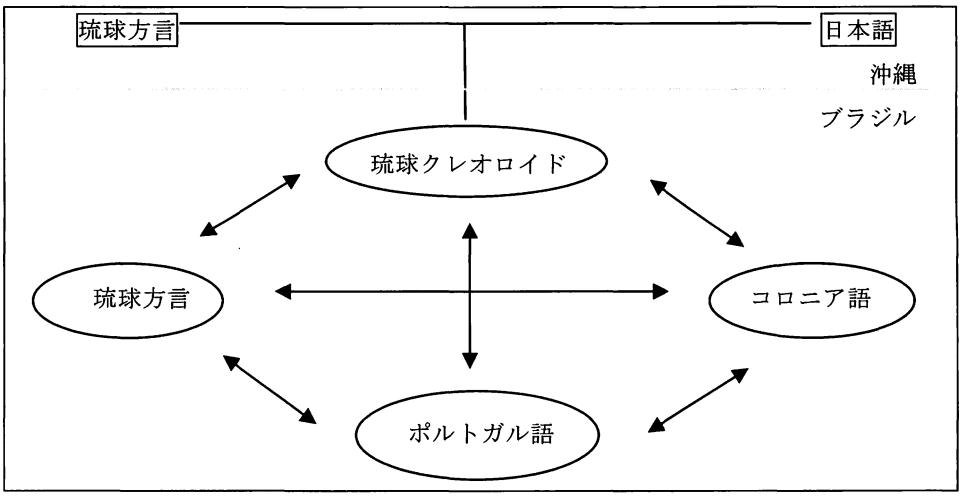

図2　4言語接触の観点

ラジルで発生した接触言語ではなく，多くの一世話者が母語として，ブラジルに持ち込んだ一つの言語コードとしてとらえるべきである。その根拠として，琉球方言母語話者のみならず，琉球方言が話せない二世の世代でも琉球クレオロイドの影響が見られることが挙げられる。

Ⅲ．言語使用の実態および各世代の言語運用能力

ここでは，インタビューとアンケートを通して得られた情報を参考にしつつ，言語使用および話者の言語運用能力について記述を行なう。「波下線」で示しているものは実際にインフォーマントから聞いた発言である。

まず，本論で①「琉球方言」，②「ポルトガル語」，③「琉球クレオロイド」，④「コロニア語」と呼んでいるものをコミュニティー内では，①「ウチナーグチ」，②「ブラジル語」，③と④は総称して「日本語」と呼ぶことが多い。③と④を区別する場合，前者は「ウチナーンチュの日本語」，後者は「共通語（＝日本標準語）」と使い分けている。

世代，年齢，地域や生活習慣などの違いによって言語使用の実態が異なってくる。例えば，高齢の一世話者がいる家庭では琉球方言が第一言語として使用されることがある。祖父母が同居する家庭で育った二世と三世は琉球方言を理解する能力がある。祖父母が琉球方言で話すことに対して，孫は琉球クレオロイドまたはポルトガル語で答えるという例がよく見られる。また，家庭内で意識的に子どもに対してポルトガル語を使用しない親もいれば（子どもに日本語を覚えてほしいため），子どもの学校教育のことを考え，ポルトガル語を使用する親もいる。更に，子どもに対して「(琉球) 方言だけを使っても将来役に

立たない」という意識を持つ話者もいる。また，フェイラ（露天商）で働く人や，カラオケをする人は他府県出身の日本人との交流の中で日常的に「日本語」（＝話者の意識の中では「日本語」であるが，実際使用しているのは琉球クレオロイドである）を話している。

現在の沖縄系社会には，琉球方言または琉球クレオロイドを母語とする一世話者と同様に，琉球方言または琉球クレオロイドを母語とする子どもの移民である準二世話者[4)]とポルトガル語を母語とする二世から六世までの話者がいる。

各世代の特徴について述べると，一世は，琉球方言のモノリンガル，琉球クレオロイドのモノリンガル，琉球方言と琉球クレオロイドのバイリンガル，琉球方言とポルトガル語のバイリンガル，琉球クレオロイドとポルトガル語のバイリンガル，琉球方言と琉球クレオロイドとポルトガル語のトライリンガルがいる。ブラジル社会の中で生活をしていくうちに，一世話者はポルトガル語を覚え，日常会話の中で琉球方言と琉球クレオロイドと同時にポルトガル語も使用するようになった。特に，沖縄系社会から離れた地域に暮らしている一世，またはサン・パウロ市内に居住しているがブラジル人との交流が多い一世の話者はポルトガル語の運用力が比較的高く，他の話者よりも日本語の会話の中でポルトガル語の要素が頻繁にあらわれる。70歳以上の一世の話者は移民する前に沖縄でほとんど学校教育を受けていないため，標準日本語が話せず琉球方言のモノリンガルであるか，琉球方言と琉球クレオロイドのバイリンガルである。ブラジルで暮らしていても，沖縄にいる高齢者と同様に琉球方言を第一言語として使用している人が多い。それは，ブラジルではコミュニケーションの助けになる子どもや孫に頼って，ポルトガル語を覚えなくても不自由はしないという環境に置かれているからであろう。一方，一世の50代から60代の人は，母語の琉球方言が一番話しやすいという話者でも，仕事のためにポルトガル語を習得している琉球方言のバイリンガル，または琉球方言と琉球クレオロイドとポルトガル語のトライリンガルが多い。

一方，準二世話者はポルトガル語のモノリンガル，琉球方言とポルトガル語のバイリンガル，琉球クレオロイドとポルトガル語のバイリンガル，琉球方言と琉球クレオロイドとポルトガル語のトライリンガルがいる。日本で小学校以上の学校に通っておらず，ブラジルで学校に通うようになり二世のような言語習得過程を経験している。そのため，全員ポルトガル語が話せるし，発音の面でもネイティブスピーカー並みのポルトガル語ができる。ポルトガル語の運用力が一番高く，大学卒の人も少なくない。また，一世に比べポルトガル語の力が強くなり，琉球方言と琉球クレオロイドの力が弱くなる場合があり，「日本語は話せるが，日本語の文字の読み書きができない」という人が多い。しかし，彼らの琉球方言と琉球クレオロイドのアクセントにはポルトガル語の影響はあまり見られない。

また，二世は，ポルトガル語のモノリンガル，琉球方言とポルトガル語のバイリンガル，琉球クレオロイドとポルトガル語のバイリンガル，琉球方言と琉球クレオロイドとポルト

ガル語のトライリンガルがいる。準二世と異なり，発音上ポルトガル語に影響されていることが多く，琉球方言または琉球クレオロイドの発音が上手な場合「二世に思えない」という様に評価される。また，年齢によって違いが見られる。例えば，40歳以上の人は昔の経済的な理由で中学校までしか通っていない人が多く，若い世代の二世に比べポルトガル語が話せない年寄りの人との接触が多いため，琉球方言と琉球クレオロイドの要素が日常の会話に多く見られる。それに対し，40歳以下の若年層は高校以上の学歴を持っている人が多く，ポルトガル語は非日系のブラジル人並みに話せるし，家庭内でも琉球方言と琉球クレオロイドのみで会話することはあまりない。

ブラジルにいる40歳以下の日系人はほとんど三世か四世の人が占めている。ポルトガル語モノリンガルが最も多く見られるものの，二世と同様にポルトガル語のモノリンガル，琉球方言とポルトガル語のバイリンガル，琉球クレオロイドとポルトガル語のバイリンガル，琉球方言と琉球クレオロイドとポルトガル語のトライリンガルがいる。二世と異なり，三世と四世は家庭内でもポルトガル語を第一言語として使用していることが多い。その場合，琉球クレオロイドを話さず，コロニア語が日本語のバリエーションとしてあらわれる。

インフォーマントになった10名の沖縄県系人を例にとると，話者の言語運用能力を表1のようにあらわすことができる。一世話者を中心に示しているが，比較のため，準二世，二世と三世の例も挙げている。表中，●は「母語として習得し，話せる」，◎は「家庭で第二言語として習得し，話せる」，○は「外国語として習得し，話せる」，△は「聞けるが話せない」，×は「聞けないし，話せない」いう意味をあらわしている。

表1を見てわかるとおり，バイリンガルとトライリンガルの場合は，世代と年齢によって，それぞれの言語の習得方法と運用能力が異なってくる。例えば，バイリンガルであるSAは琉球方言を母語とし，琉球クレオロイドを第二言語として習得しているものの，ポルトガル語は聞けるが話せない。一方，同様に一世のCMは，琉球方言を母語としながら，

表1　話者の言語運用能力

世代	話者	琉球方言	琉球クレオロイド	ポルトガル語
一世75歳以上	SA	●	◎	△
	YK	●	◎	△
	HA	●	◎	△
一世75歳以下	CM	●	◎	○
一世70歳以下	YY	◎	●	○
	YY	◎	●	○
	YY	◎	●	○
準二世	MA	◎	●	○
二世20代	ATY	△	◎	●
三世	FHA	×	×	●

琉球クレオロイドを第二言語として習得し，ポルトガル語を移民後に外国語として習得したトライリンガルである。また，準二世のMAは琉球クレオロイドを母語とし，琉球方言を第二言語として習得し，ポルトガル語を移民後に外国語として習得した。一方，二世のATKはポルトガル語を母語として習得し，琉球クレオロイドは第二言語として習得したものの，琉球方言は聞けるが話せない。また，ポルトガル語母語話者である三世のFHAはポルトガル語が第一言語として使用される家庭で育ち，琉球方言は聞けないし，話せない。FHAは琉球クレオロイドを話さず，日本語学校で標準日本語を学習した。

Ⅳ．一世話者の言語に見られる語彙的・音韻的・文法的な特徴

ここでは，調査で収録した自然談話に見られた語彙的・音韻的・文法的な特徴を挙げていく。まず，概観的に語彙的・音韻的・文法的な特徴について記述し，次に談話の分析を通して，それらの特徴が如何にあらわれているのかを見ていくことにする。なお，記述の中に，筆者がブラジルの日々の暮らしの中で実際に確認した特徴も挙げている。

昔の生活習慣，日常の習慣，言語生活，精神文化など，様々なテーマをとりあげて，インタビューを行なった。談話の内容や話者の出身地がそれぞれ異なるが，一般的に見られるような特徴が存在することが確認された。まず，語彙的な特徴について記述する。

1．一世の言語に見られる語彙的な特徴

語彙の借用に関して，以下のような特徴が見られた。

①一世話者の談話には，ポルトガル語の単語の借用がよく見られるが，具体名詞であらわされるものが多い。例えば，自然談話では「roupa（洋服）」，「cadeira（椅子）」，「bilhete（切符）」，「sapato（靴）」，「parede（壁）」，「alho（にんにく）」という語彙が借用された。それらに相当する日本語の語彙が存在するにもかかわらず，日常的に使うものを指す単語は無意識に借用されるのである。

②「empregada（家事を行なう使用人）のようなブラジルでは日常生活に見られる概念や，または「panela de pressão（圧力鍋）」のようにかつて沖縄になかったものは，ポルトガル語であらわされる傾向が見られる。

③ポルトガル語と日本語が共通している外来語の場合，ポルトガル語の単語として発音される傾向が見られる。例えば，「DVD」は「ディーブイディー」ではなく，「デヴェデ」と発音される。また，「bacon」は日本語の「ベーコン」([be:koɴ])ではなく，「ベイコゥン」[beikõɴ]と発音される。それらの外来語は琉球方言あるいは琉球クレオロイドにも戦後に導入された語彙で，移民する前に沖縄で使用されていなかったからだと考えられる。

④談話にも見られるように，ポルトガル語の人称代名詞の「você（あなた）」がよく借用

されるが，話者によれば，日本語の「あなた」を使用すると，場合によって失礼な印象を与えてしまうため，ポルトガル語の「você」を使用するそうである。

⑤時間をあらわす時間名詞や物の値段や数などをあらわす数詞がよく借用される。それはブラジル人との日常会話でよく使用されている語彙だからであろう。例えば，「domingo（日曜日）」や「dois ano[5]（二歳）」というポルトガル語が談話に見られた。

⑥一世の会話を聞くと，ポルトガル語があまり話せない話者でも，ポルトガル語の「não（いや，いいえ）」という感嘆詞がよく借用されることがわかる。多くの一世話者は無意識にこの表現を使用しているが，これはよく耳にする表現だからであろう。

⑦沖縄文化独特の概念や物をあらわす場合，琉球方言が使用される傾向が見られる。例えば，「トートーメー（位牌）」，「ウチャトー（お茶湯）」が談話に見られた例である。他に，「シーサー（沖縄の獅子）」，「カチャーシー（沖縄の踊り）」，「カジマヤー（97歳の長寿の祝い）」などの語彙が挙げられる。

⑧琉球方言に干渉され，日本語の名詞＋琉球方言の指小辞の「グヮー」という語彙の組み合わせがよく見られる。「グヮー」という語彙は，「小さいもの」，「かわいいもの」，「量の少ないもの」，「軽蔑」など，様々なニュアンスで使用される。例えば，「モーフグヮー（小さい毛布）」，「ニクグヮー（小さく切った肉）」，「マースグヮー（塩を少々）」という使い方が見られた。

⑨琉球クレオロイドの語彙がよく見られる。例えば，「彼ら」の意味で「アレダチ（あれ達）」，「ちゃんと」の意味で「ディッパ(立派)」，「着る」の意味で「ツケル」，「あげる」の意味で「モラワス」などが挙げられる。

また，語彙の意味的側面に関しては，ブラジルにおいて意味が変容する語彙が見られる。例えば，コロニア語にも見られるように，「外人」という語彙は「非日系人」の意味で使用される。本来，「外人」はブラジル人に対する軽蔑的な意味もあったが，現代，若い世代の間で中立的な意味で使用される。例えば，「A maioria dos meus amigos é *gaijin*（私の友達のほとんどは外人（非日系人）だ」と言うことができる。また，琉球方言の語彙にも意味の変容が見られる。例えば，一世話者によれば，「シマンチュ」（＝シマの人）という琉球方言の語彙は，沖縄では「同じ部落の人」という意味で使用されるが，ブラジルでは「シマンチュ」は同じ部落の人のみならず，「同じ市町村の人」の意味でも使用される。

2. 一世の言語に見られる音韻的な特徴

一世話者は琉球方言，または琉球クレオロイドが母語であるため，日本語とポルトガル語の単語を発音するとき，それらの影響が見られる。例えば，琉球方言に影響され，日本語の接尾詞「ら」（等）を「ダ」と発音し，「りっぱ」という単語を「ディッパ」と発音す

る。これらは，琉球方言の影響で[r]から[d]への音の変化が起きているからである。

また，興味深いことに，ポルトガル語の単語を発音する場合にも琉球方言の影響が見られる。例えば，「lata」（[lata]）と「leite」（[leiʧi]）のように，[l]が冒頭に来るポルトガル語の単語は，[l]が[d]に変わることがある。この場合，「lata」を[data]と発音し，「leite」を[deiʧi]と発音する話者がいる。これは，まず[l]と[r]を区別しない日本語母語話者のように，[l]が[r]に聞こえ，それが更に[d]へ変化していると考えられる。

また，ポルトガル語の鼻母音を上手に発音できないことが，一世話者の一つの特徴だとされている。例えば，「não（いいえ）」（[nãw]）という単語を「nonˌ」，「pão（パン）」（[pãw]）という単語を[ponˌ]，「chão（地面）」（[ʃãw]）という単語を[ʃonˌ]のように，[ãw]と発音すべき音を[onˌ]と発音している。日本語にも琉球方言にも存在しない鼻母音の音は一世話者にとって発音しにくいようである。なお，準二世は移住した当時の年齢によって，鼻母音の発音ができる話者とできない話者がおり，二世以降はどの話者でもこの発音ができる。

また，人称代名詞の「私」という意味で，「eu」（[ew]と発音される）という単語の代わりに「yo」という単語がよく使用される。これはスペイン語の単語「yo」（私）がそのまま使用されているという意見もあるが，スペイン語圏の国に暮らしていない沖縄県系の話者にでもこの言い方が見られるし，ポルトガル語ネイティブ話者には同じ現象は見られないため，音韻変化の可能性が高いと思われる。琉球方言をはじめ世界の言語でも見られるように，[e]と[u]の二つの母音が融合し，[jo]と発音される音韻変化が起きていると考えられる。なお，他府県出身の日本人も同じように発音をしている。複数形の「私たち」に対して，「yo」に日本語の「等」がくっつき，「yo-ra」という言い方が，沖縄県系人を含むコロニア社会全体でよく見られる。

3. 一世の言語に見られる文法的な特徴

一世話者の言語の文法体系には，母語の影響に起因して，琉球クレオロイドの要素がもっとも多く見られる。前述したように，琉球クレオロイドは一世話者が移民する前に，母語，または第二言語として習得した一つの言語コードである。

また，コロニア語の要素もよく使用される。しかし，ポルトガル語の影響から発生したコロニア語の要素ではなく，西日本方言的なコロニア語が使用される。特に，現在において他府県系人と接している話者，また，かつて他府県系人と接していた話者によく見られる。一方，ポルトガル語の文法的な影響は見られない。

1）琉球クレオロイドの文法的な要素

後節では，自然談話には，以下のような琉球クレオロイドの影響が見られた。

①「はだか格」（φで示す）がよく使用される。談話には「を格」，「が格」，「に格」，「の格」が「はだか格」であわれる例があった。標準日本語にも「はだか格」が見られるが，琉球クレオロイドほど使用頻度は高くない。

◇あのセビロφ（＝を）ツケテ。

◇月曜日 feira（露天商）φ（＝が）休みだったからね。

◇また domingo（日曜日）は，domingo はね，こっちφ（=に）帰ってくる。

◇二つ（二歳）φ（＝に）なる人が自分で着物，roupa（服）φ（＝を）着替えて。

◇今の Praça República（地名）φ（＝の）向こうに映画館があった。

②「シヨッタ」形式が目撃明示過去[6]と過去の反復・習慣をあらわすために用いられる。

◇戦前移民の方がね……背広着て，ネクタイして，そのままトオリヨッタ。目撃明示過去

◇子どもダに全部日本語ツカイヨッタ。過去の反復・習慣

③能力可能は，琉球クレオロイドと同様に「シキレル」形式であらわされる。例えば，「探す」という動詞の能力可能の形は「サガシキレル」であらわされる。

④新情報を提示するために，琉球クレオロイドのように，終助詞の「ワケ」が使用される。

◇あの人のいっぱい，やっぱり気持ちわるくなるよね，人がいっぱいいるところね。そんなところでも気絶したりしたというけど，これわからんワケ，自分たちは。

⑤「琉球方言の名詞」＋「する」という組み合わせがよく見られる。例えば，「チャンプルースル」は琉球方言の「チャンプルー」（混ぜこぜ）と日本語の「する」を組み合わせたもので，「交ぜる」という意味の琉球クレオロイドの動詞である。他に，「フタグヮー」＋「する」＝「フタグヮースル」（ふたをする），「ゴーヤーイリチャー」＋「する」＝「ゴーヤーイリチャースル」（ゴーヤー炒めを作る）という例が見られた。

2）コロニア語の文法的な要素

一方，西日本方言の影響によって発生されたコロニア語の要素がよく使用される。しかし，話者は自らが西日本方言形式を使用していることを意識していないことが多い。以下のような西日本方言的なコロニア語の特徴が見られた。

①動詞の否定形は西日本方言のように，「セン」形式であらわれる傾向が見られる。例えば，「わからん」，「せん」，「できん」，「行かん」，「履かんといけん」，「こんといかん」などの活用形が見られた。

②「シトル」と「シトッタ」形式が使用される。コロニア語のように，非過去の動作の進行をあらわすために「シトル」が用いられ，過去の継続相をあらわすために「シトッタ」が用いられている。自然談話に，「踊りならっとる」，「ブラジル学校いっとった」

という例が見られた。

③引用文の中で，引用形式「と」が脱落する。これは，工藤真由美（2009）は本土出身の一世のコロニア語の特徴として挙げており，西日本以外の人が渡伯後の言語形成の過程で，自然習得された中国・四国地方などに見られる，いわゆる「ト抜け」と認められると指摘している。と同時に「言う」のテ形がウ音便化し，「～いうて（＝といって）」の使用がよく見られる。

◇「Então（じゃあ）これどうするか」いうて（＝といって），「bota（長靴）履いてるから入れんから você（あなた）これ持っていきなさい，いうて（＝といって）ね」

④コロニア語の「ポルトガル語の動詞（原形あるいは現在・三人称の形）」＋する」という組み合わせがよく見られる。例えば，ポルトガル語の動詞「ajuda（手伝う」と日本語の「する」を組み合わせると，「ajuda する」というコロニア語の動詞ができる。日本語の動詞のように活用させ，「ajuda しない」，「ajuda した」，「ajuda してる」という言い方がよくされる。この形式は，コロニア語の特徴であると同時に，前に挙げた琉球クレオロイドの「琉球方言の名詞＋する」という形式の影響も受けているといえよう。

Ⅴ．自然談話の分析

次に，３つの談話の分析を通して，語彙，音韻，文法の特徴がそれぞれ如何にあらわれているのかを確認したい。談話①～談話③は，インタビューアーとインフォーマントとの対話の中で自然談話として収録した談話である。それぞれの分析として，語彙，音韻，文法の順番で特徴を挙げていき，考察を加える。

表記法について，4 言語コードが混交されていることが確認できるように，ポルトガル語はアルファベット，琉球方言は下線・カタカナ，琉球クレオロイドは二重下線・カタカナ，コロニア語（琉球クレオロイドと共通のものもあるが）は下線・漢字かなで表記する。標準日本語と共通しているその他のものについては漢字・かな混じりで下線などを付していない。なお，どちらにあてはまるのか不明のものには波下線を引いている。

談話①

話者：ＳＡさん，女性，一世，1919 年生まれ，那覇市・小禄出身。琉球方言を母語とする。1961 年（当時 42 歳）にボリビアに移住し，1966 年にブラジルへ再移住した。現在，ゲートボールなどの活動で他の沖縄系人と交流する。ポルトガル語は多少理解できる。

内容：日常の習慣について話している。

《イ》（インタビューアー）：日本のテレビとか見たりしますか。

SA:そうですね。ビデオなんかね，たくさんありますから，**DVD**（デヴェデ）とか。もう，暇なときは，おばあちゃんは，ゲートボール行って，もう夜は……私はイッスーカン（一週間）はね，こっちで，ゲートボールが，こっち，近いところにありますから，ゲートボール（して）遊んで，もうあの，日曜日にこっち連れてきたら，またあの，土曜日にね，アレダチ（彼ら）が連れに来るから。アパート，みんなあの，少し，何十分かね，アパートにみんな住んでますから，マゴダチ（孫たち）が連れに来るから，またあっちで泊まって，おじいちゃんのトートーメー（位牌）もあっちにあるから，ウチャトー（お茶湯）して。また **domingo**（日曜日）は，**domingo** はね，こっち帰ってくる。

（中略）

《イ》：おばあちゃんは一人で買い物に行ったりしますか，一人で。

SA:こっちにあのスーパーね，小さいスーパーがありますから，私自分一人，お金持って，出かけたら，あっちで買って，みんな買って集めたら，あっちの人が，店の人が車カラ（で）連れてくる。だから，あれこれみんな買ってから，アレダチ（彼ら）が連れてくるから，コンナシテ（こうして）。

《イ》：ウチナーンチュの人ですか。

SA:non,non（いやいや）外人（非日系人），こっちの人，こっちの人。「あんたがた（あなたち），**ajuda できる**（手伝える）でしょう」いうてから，「ajuda」いうたら，「手伝い」ね。「できるよ，連れていくよ」いうたら，たくさん買って，掃除するのも，食べるのも，あれもこれも買って，集めたら，アレダチ（彼ら）が連れてくる，ヤー（家），家（うち）まで。コンナシテ（こうして）。

ＳＡさんの談話には，次の特徴が見られる。

語彙的な特徴

①「DVD」は日本語にもある名詞なのであるが，ＳＡさんは日本語の「ディーブイディー」という発音ではなく，ポルトガル語の「デヴェデ」と発音している。

②「トートーメー（位牌）」，「ウチャトー（お茶湯）」という琉球方言の単語を使用しているが，これは沖縄文化独特のものを指しているため，あえて標準日本語に訳さないのが普通である。

③「domingo（＝日曜日）」というポルトガル語の単語を借用しているが，時間名詞はブラジル人との日常会話でよく使用されているからであろう。

④「彼ら」の意味で「アレダチ（あれ達）」を使用しているが，これは琉球方言で「アリ」という指示代名詞が人を指すときにも使用されるからである。

⑤「こんなして」は標準日本語の「こうして」または「こうやって」に相当する琉球クレオロイドである。

⑥ポルトガル語の「não, não」（いやいや）という感嘆詞を借用している。多くの一世話者は日本語の「いやいや」の代わりに無意識にこの表現を使用しているが，これはよく耳にするからであろう。

⑦「外人」という単語は「非日系人」の意味で使用されている。

⑧「あんたがた」という古い日本語を使用しているが，これは他の沖縄県系人も，日常的に「あんただち」に対する丁寧な言い方としてよく使用されているものである。

⑨「ajuda できる（手伝える）」と言っているが，「手伝う」という意味のポルトガル語の動詞「ajuda」＋「する」を組み合わせ，可能形を作っている。

⑩「自分の家」という意味で，「ヤー」という琉球方言を使用したが，意識して「家（うち）」という日本語に言いなおした。

音韻的な特徴

①「一週間」という単語を「イッスーカン」と発音している。拗音の直音化は琉球方言の影響である。

②「あれ達」の「達」を「ダチ」と発音している。琉球クレオロイドでは「達」は濁音で発音されることが多い。例えば，「先生ダチ（先生たち）」，「学生ダチ（学生たち）」とよく聞く。

③ポルトガル語の「não, não」（[nãw]）という単語を「non,non」（[nɔN]）と発音している。

また，他のポルトガル語の単語もネイティブの発音ではなく，一世独特の発音をしている。談話全体に琉球クレオロイドのアクセントやイントネーションが見られる。

文法的な特徴

①琉球クレオロイドでも見られるように交通手段をあらわすのに，「で格」ではなく「から格」が使用されている（「車から連れてくる」）。

②「ajuda する」というコロニア語の動詞を可能形にして，「ajuda できる」と言っている。

③「あんたがた ajuda できるでしょう」いうて（＝といって）から，「ajuda」いうたら（＝といったら），「手伝い」ね。「できるよ，連れていくよ」いうたら（＝といったら）のように引用形式「と」が脱落される。また，同時に，「言う」のテ形がウ音便化され，「～いうて」という形が用いられる。

④また，琉球クレオロイドのように，「はだか格」が見られる。「はだか格」は「φ」で示す。

◇暇なときは，おばあちゃんは，**ゲートボールφ（=に）行って**

◇おじいちゃんのトートーメーもあっちにあるから，**茶φ（=を）とおして**

◇また domingo は，domingo はね，**こっちφ（=に）帰ってくる**

◇私自分一人，**お金φ（=を）持って**，出かけたら

談話②

話者：HA さん，一世，1935 年生まれ，大里村・字稲嶺出身。琉球方言を母語とする。1958 年（当時 23 歳）にボリビアに移住し，1965 年にブラジルへ再移住した。ブラジルで生活していく中で HA さんはポルトガル語が理解できるようになり，現在非日系のブラジル人と接する機会も多く，彼らとコミュニケーションができる。また，家庭内と沖縄県人会などの行事で日常的に琉球方言と琉球クレオロイドを使用している。

内容：民謡が好きな孫について話している。お孫さんはインタビューの場にいた。

HA:これは二つヤティ（だった），S（孫の名前）？**dois ano**（二歳）ヤティ（だった）カイカンカイ　インジャシェ（会館に行ったじゃない）。**Sabe**（あの…）**, dois ano**（二歳）のときよ，私が民謡に行くでしょう，**Casa Verde**（地名）会館に行ったらね，二つなる人が自分で着物（服），**roupa**（服）着替えて，この玄関に待ってるの。こっちで，なんとも言わないで，「**Ow**（おい），S（孫の名前）ッヤー　マーカイガ（あなたはどこに行くの）」と言ったらね，「今日は民謡よ」。そして毎日連れていって，毎週眠るとき私 **cadeira**（椅子）にね，私 **cadeira** に座って，こうしてひくでしょう，この **cadeira** はこっち準備して，こっちに頭寝かして，モーフグヮー（小さい毛布）もいつも持っていって。うちに帰るとき抱っこよ，抱っこしてカエッテキヨッタ（帰った）。**dois ano** のときからよ，三歳，その三歳のときからもう「アサドゥヤーユンタ[7]」覚えてすぐウタイヨッタ（歌った），一人で。

HA さんの談話には，次の特徴が見られる。

語彙的特徴

①ポルトガル語の数詞の【**dois**（二）　**ano(s)**（歳）】，固有名詞の【**Casa Verde**（地名）】，普通名詞の【**roupa**（洋服）】，【**cadeira**（椅子）】が借用されている。ポルトガル語の単語の借用は単語レベルで起こりやすい。

②「**Sabe,** dois ano のときよ」のように，「sabe」というポルトガル語の表現が使用されてい

るが，これは「saber（わかる）」という動詞の二人称の形である。しかし，「わかる？」のように相手があることについて知識を持っているのか確認しているのではなく，相手と発話を共有する調子にしたいときに使用される，英語の「You know？」に相当するものである。つまり，日本語の「あの･･･」に相当するものである。また，「**Ow**，S（孫の名前）…」の「**ow**」は日本語の「おい」に相当するもので，ポルトガル語の呼びかけの感嘆詞である。このように口語的な表現まで使いこなせていることは，話者がポルトガル語に慣れていることを表現しているといえよう。

③「自分で**着物**，**roupa** 着替えて」と言っているが，「着物」は和服のことを指しているのではなく，身に着る「衣服」または「洋服」の意味で使用されている。コロニア語でも同じような使い方が見られるが，かつて「日常の衣服」として着物を着ていた移民たちがブラジルに持ち込んだ単語の本来の意味がコロニアの間で残っているからである。

④「**モーフグヮー**」と言っているが，これは日本語の名詞「毛布」に琉球方言の指小辞の「グヮー」がくっつき，「小さい毛布」という意味をあらわしているのである。

音韻的な特徴

ポルトガル語の単語はネイティブの発音ではなく，一世独特の発音をしている。談話全体に琉球クレオロイドのアクセントやイントネーションが見られる。

文法的な特徴

①琉球方言は，単純な名詞の使用ではなく，「二つヤティ（二つだった？）」，「dois ano ヤティ（二歳だった？）」のようにポルトガル語または日本語の単語に続けて述語文としてあらわれている。また，「カイカンカイ　インジャシェ（会館に行ったじゃない）」，「Ow，S（孫の名前）ッヤー　マーカイガ（あなたはどこに行くの？）」のように文全体が琉球方言になることもある。

②「カエッテキヨッタ（帰ってきた）」では過去の反復習慣，「ウタイヨッタ」では話し手が直接確認した出来事，それぞれ琉球クレオロイドと同様な意味で「シヨッタ」形式が用いられている。

③「はだか格」（φで示す）の使用が見られる。

◇二つφ（＝に）なる人が自分で着物，**roupaφ**（＝を）着替えて

◇この cadeira はこっち準備して，こっちに頭φ（＝を）寝かして

◇その三歳のときからもうアサドゥヤーユンタφ（＝を）覚えて

談話③

話者：CM さん，一世，男性，1935 年生まれ，嘉手納町出身，沖縄で高等学校を卒業した

後，22歳の時にボリビアに移住した。1963年にブラジルに再移住し，農業から商売まで，様々な職業に関わった。ブラジルで生活していく中でCMさんはポルトガル語を自然習得し，現代は日常会話のポルトガル語，そして琉球クレオロイドや琉球方言を使用している。

内容：言語意識に関するインタビューの中で，「これから子どもや孫に対する日本語使用について，どのぐらい期待していますか」というインタビューアーの質問に対して，話者は次のように答えている。

CM：もうね，普通の，期待というよりは，普通ね，この，かぞ，家庭の中でのことばはね，全部日本語かウチナーグチ（琉球方言）をしてもらいたいと。これはあの，なんのためにこういう，あの，ことやるかといえばね，あの，昔，あの，ブラジルに来て当時（来た当時）ね，ボリビアではそう，そうも言わなかったんだか，ブラジルに来て当時，子どもダ（子どもたち）に全部日本語ツカイヨッタ（使った）。うと，ウチナーグチね。そうしたら，あの，隣の人がね，ウリウチナーンチュ（その沖縄の人）がね，君のその，その子どもダに対する，そのなんというの，このことばね，これは間違ってるんだよ。お互いことばわからんから，ポルトガル語，子どもダに教えてね，そうせんとその商売ができんよ……ったの。そして **yo já** 返答，すぐコタエヨッタ（答えた）の。こっちはブラジルだってね，彼ら一歩うちから出れば，もうポルトガル語の世界ね，それから，せめてうちの中ででもそのウチナーグチ，日本語使ってもらいたい。で，沖縄には，親戚もいるしね，いずれ帰るという覚悟だったからね，うちは，沖縄にね。そのために，このもうボリビアから長女から **até caçula**（末っ子まで），全部日本語オシエヨッタ（教えた）。家庭の中ではね，今でも，家庭の中ばかりでも，その日本語とウチナーグチで通用するように……

CMさんの談話には，次の特徴が見られる。

語彙的な特徴

①「ウチナーグチ（琉球方言）をしてもらいたい」，「そうしたら，あの隣の人がね，ウリウチナーンチュ（その沖縄の人）がね」のように，琉球方言が日本語の文章の中で使用されている。

②「そしてyo（私） já（もう）返答，すぐコタエヨッタの」，「もうボリビアから長女から até（まで） caçula（末っ子）」のように，ポルトガル語の単語が日本語の文章の中で借用されている。

③また，「子ども」という名詞の複数形は日本語の接尾詞「ら」（等）が名詞の後ろにく

っつき「子どもダ」と発音されている。琉球クレオロイドでは「子どもナンカ」,「子どもダチ」，コロニア語では「子どもら」のような特徴的な表現が見られるが，CM さんと同様の使い方は見られないため，波下線を引いている。

音韻的な特徴

①「子どもダ（子どもら）」では，[r]から[d]への発音変化は琉球方言の影響と思われる。

②「eu」（[ew]と発音する）（私）という単語は [jo] と発音されているが，これはコロニア語でも見られる。琉球方言をはじめ世界の言語でも見られるように，[e]と[u] の二つの母音が融合し，[jo] と発音される音韻変化が起きていると考えられる。

また，他のポルトガル語の単語もネイティブの発音ではなく，一世独特の発音をしている。談話全体に琉球クレオロイドのアクセントやイントネーションが見られる。

文法的な特徴

①過去の時点をあらわすのに「ブラジルに来て当時」のように「～タ当時」の代わりに「～テ当時」の形が用いられているが，この形式は筆者自身が沖縄在住のブラジル移民経験者の一世話者の会話でも観察したことがあり，CM さん独自の使い方ではないと思われる。現段階では，その由来はまだ不明であり，今後確認が必要とされる。

②琉球クレオロイドと同様に，「子どもダに全部日本語ツカイヨッタ」,「全部日本語オシエヨッタ」のように，過去の反復・習慣をあらわすために「～ショッタ」形式が用いられている。

③しかし，「そして yo（私） já（もう）返答，すぐコタエヨッタ」でも「～ショッタ」形式が用いられているが，琉球クレオロイドでは一人称による過去のアクチュアルな出来事をあらわすことはない。

④動詞の否定をあらわす場合，「わからん」,「せん」,「できん」のように，「センン」の西日本方言形式が用いられている。これは琉球クレオロイドと共通しているが，コロニア社会ではよく使用される形式である。

⑤また，琉球クレオロイドのように，「はだか格」（φ で示す）の使用が見られる。

◇子どもダに全部日本語 φ（=を）ツカイヨッタ

◇お互いことば φ（＝が）わからんから，ポルトガル語 φ（＝を）子どもダに教えて

◇せめてうちの中ででもそのウチナーグチ，日本語 φ（＝を）使ってもらいたい

Ⅵ．まとめ

自然談話の分析を通して，やはり「ブラジル沖縄コロニア語」では琉球方言，ポルトガ

ル語，琉球クレオロイド，コロニア語の4言語が接触しており，独特な体系が生成されていることが確認できた。

語彙的・音韻的・文法的にこの4言語の使用や借用，または干渉が見られる。言語コード別にいうと，琉球方言，特に琉球方言母語話者の場合は，語彙レベルでも文レベルでもあらわれ，音韻的にも影響を及ぼしている。一方，ポルトガル語では一世の間において，音韻的に影響を及ぼしていないが，語彙の借用は頻繁に行なわれている。また，琉球クレオロイドは，語彙，音韻，文法の側面であらわれている。コロニア語では特に，西日本方言的な特徴が沖縄系の一世の話者の間で見られ，語彙と文法の側面であらわれている。

一世の特徴の全体についてまとめると，まず語彙的な特徴として，一世話者の言語に見られるポルトガル語の単語は具体名詞であられやすい。また，かつて沖縄になかった物や概念を指す場合は，ポルトガル語の名詞が使用される傾向が見られる。一方，沖縄文化独特の物や概念を指す場合は，琉球方言の名詞が使用される。また，語彙の意味的側面に関しては，ブラジルにおいて意味が変容する語彙が見られる。特に，語彙の意味の変容について今後，詳細な調査を行ないたい。

また音韻的な特徴として，一世話者は琉球方言，または琉球クレオロイドが母語であるため，日本語とポルトガル語の単語を発音するとき，それらの影響が見られる。一世はポルトガル語の鼻母音など，ネイティブのように発音ができず，一世独特の発音が見られる。音韻的な特徴は自然談話で見られた特徴のみ挙げているが，更なる調査を通して，データを収集し，詳細な分析が必要とされる。

文法的な側面では，一世にはポルトガル語の影響が見られず，母語の影響に起因して，琉球クレオロイドの要素がもっとも多く見られる。また，コロニア語の要素もよく使用されるが，ポルトガル語の影響から発生したコロニア語の要素ではなく，西日本方言的なコロニア語が使用される。特に，他府県系人と接している一世話者によく見られる。また，コロニア語は形式上であらわれやすいのに対し，琉球クレオロイドは形式上でも意味的側面でも影響を及ぼしていることがわかった。

４言語コードの接触は世界の接触言語の中でも珍しく，このように複雑な接触過程から成る言語を詳細に分析することは，「言語接触論」に大きく貢献すると思われる。筆者は今後もこの研究を深めていきたい。

付記

この論文は，筆者が琉球大学に提出した修士論文を加筆・修正したものである。本研究を進めるにあたり，ご指導を頂いた修士論文指導教員の狩俣繁久教授に深謝いたします。また，現地調査にあたり，沖縄県人会のリーダーの方々をはじめ，各支部の皆様，親戚や友人のご家族の皆様にお世話になった。記して，深く感謝いたします。

注

1) 厳密に言えば「ブラジルポルトガル語」のことである。本国ポルトガルで話されるイベリアポルトガル語とは若干異なるが，本論では単純に「ポルトガル語」と呼ぶことにする。
2) 琉球クレオロイドとは，沖縄地方で話されている「ウチナーヤマトゥグチ」，奄美地方で話されている「トン普通語」とこれまで呼ばれてきたものをロング・ダニエル（2009）「第二言語習得論と言語接触論から見たウチナーヤマトゥグチ」等の名付けに従った用語である。
3) コロニア語とはブラジルで話されている日本語のバリエーションのことをいう。ポルトガル語の「colônia（＝植民，植民地）」という単語をブラジル日系人の間では「日系コミュニティー」という意味で使われている。そのことから，彼らの言語を「コロニア語」と呼ぶようになった。
4) 準二世とはブラジル生まれの二世と近い言語習得過程を経験した子ども移民のことをいう。
5) ポルトガル語で「dois anos」のようにsを伴う複数の形が正しいが，話者は単数の形を使用した。これは単数と複数を区別しない日本語または琉球方言の影響だと思われる。
6)「目撃明示過去」は工藤真由美（2008；51p）の定義に従った用語ており，話し手がある出来事を＜目撃・直接確認＞した場合に用いられる。
7) 琉球民謡の曲名である。戦後台湾から沖縄への労働者派遣事業に関する档案資料である。主に中央研究院近現代史研究所に所蔵する資料を引用している。

文献

朝日祥之，ダニエル・ロング（2010）「ハワイのプランテーションで作られた接触方言－19世紀末生まれの日系人の録音資料に見られるコイネ日本語－」『日本方言研究会』第91回研究発表会

かりまたしげひさ（2008）「トン普通語・ウチナーヤマトゥグチはクレオールか－琉球・クレオール日本語の研究のために－」『南島文化』（沖縄国際大学南島文化研究所紀要）第30号抜刷

国立国語研究所編（1998）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

国立国語研究所編（2000）『日系ブラジル人のバイリンガリズム　Bilingualism of Japanese Brazilians』国立国語研究所

国立国語研究所編(2000)『日本語と外国語との対照研究 VII 日本語とポルトガル語(2)　ブラジル人と日本人との接触場面』国立国語研究所

工藤真由美編（2004）『日本語のテンス・アスペクト・ムード体系－標準語研究を超えて

－』ひつじ書房
工藤真由美・八亀裕美（2008）『複数の日本語　方言からはじめる言語学』講談社選書メチエ
工藤真由美編（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房
工藤真由美・白岩広行（2010）「ボリビアの沖縄系移民社会における日本語の実態」『日本語学』29－6（2010 年 6 月号）明治書院
真田信治編（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版
白岩弘行，森田耕平，王子田笑子，工藤真由美(2010)「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触　Language contact in Colonia Okinawa, Bolivia」『阪大日本語研究』22
鈴木重幸（1972）『日本語文法論・形態論』むぎ書房
鈴木重幸（1972）『文法と文法指導』むぎ書房
高江洲頼子（1994）「ウチナーヤマトゥグチ－その音声，文法，語彙について－」『那覇の方言』沖縄言語研究センター，pp.245 - 289
ブラジル沖縄県人会（2008）ブラジル沖縄県移民史
ロング・ダニエル（2009）「第二言語習得論と言語接触論から見たウチナーヤマトゥグチ」沖縄言語研究センター研究会
CALVET, Louis-Jean（2002）*Sociolinguística- uma introdução crítica.* São Paulo, Parábola.
MASE, Yoshio (1987) *Revista do Centro de Estudos Japoneses da Universidade de São Paulo* 「A Língua Japonesa dos imigrantes japoneses e seus descendentes no Brasil」São Paulo, Estudos Japoneses vol.7 pp.137-146

（るしーら　えつこ　ぎぼ・琉球大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程院生・言語学）

Contact between Four Languages in the Okinawan Immigrant Society in Brazil
－Vocabulary, phoneme, and grammatical features in the first generation's language－

Lucila Etsuko GIBO
Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus
(Linguistics)

Keywords: Okinawan immigrant society in Brazil, Contact linguistics, Current use of the language, Linguistic features, *Ryukyu Creoloid, Colonia-go*

In Brazil, -the largest Japanese immigrant community in the world-, reside about 1.5 million Japanese descents (immigrants and their descendants) of which 10% are Okinawan. The Okinawans who migrated to Brazil carried a peculiar language with them. Their language has changed with the immigrant society in a long history. Their Portuguese language was acquired during their assimilation in Brazil. As a result, they created a combination of standard Portuguese and their mother tongue.

This paper argues that the language of the Brazilian Okinawan immigrant society developed from the contact of four languages: Okinawan dialect, Portuguese, *Ryukyu Creoloid* (originated by the contact of a Okinawan dialect and standard Japanese) and *Colonia-go* (originated by the contact of Portuguese and Japanese various dialects).

In Brazil, due to social changes such as inter-racial marriage and generational assimilation, the maintenance of Japanese and Okinawan dialect has become difficult. Because the four language interaction is at its apex today in the Okinawan community, we must continue research in this four language contact ASAP. In this paper, the vocabulary, phoneme, and grammatical features of the first generation's language development is described through analysis of actual conversations.

O contato entre quatro línguas na comunidade okinawana do Brasil
—Peculiaridades lexicais, fonéticas e gramaticais na língua da primeira geração—

No Brasil , está presente a maior comunidade imigrante japonesa de todo o mundo e nela vivem cerca de 1.5 milhões de nipônicos (imigrantes e seus descendentes), sendo que 10% são okinawanos. Os imigrantes okinawanos levaram consigo uma língua peculiar ao Brasil. Assim como a sociedade imigrante, esta língua foi se transformando ao longo da história. No processo de assimilação, a primeira geração passou a usar o português no dia a dia e a combinação deste com a língua materna fez surgir uma língua ainda mais peculiar.

O presente artigo procura tratar a língua falada pela comunidade okinawana do Brasil como o resultado do contato entre quatro línguas: o dialeto okinawano, o português, o *ryukyu creoloid* (originado do contato entre o dialeto okinawano e o japonês padrão) e *colonia-go* (originado do contato entre o português e inúmeros dialetos da ilha principal do Japão).

Fatores sociais como a diminuição do número de falantes da primeira geração e os casamentos inter-raciais fazem com que nos tempos modernos seja difícil preservar o japonês e o dialeto okinawano. O contato entre as quatro línguas encontra-se no ápice de seu dinamismo e este é o momento ideal para se realizar pesquisas deste cunho. No presente artigo, serão feitas considerações a respeito das peculiaridades lexicais, fonéticas e gramaticais na língua da primeira geração, através da análise de trechos de conversação.